
~天使~

御子柴 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（天使）

【Zコード】

N6791A

【作者名】

御子柴 隼人

【あらすじ】

ある日現れたアイツは…天使?…だった…天使との運命の出会いを書いた小説です。

(前書き)

初めての小説投稿です。感想とか貰えたらうれしいです。

オレは今まで普通に生活する高校生だった。
アイツがあらわれるまでは。

ミカエル。

そう。天使ミカエル。

アイツが今オレの前にいる。

外見は人間と変わらない。本人に天使と言われなければ気づかない。
でも、あっちから天使だと言われても普通は信じられない。
もちろんオレだって最初は信じちゃいなかつた。

だけど、ある事がきっかけで気づいた。

なぜか目の前の彼は震んでいる。

それだけじゃない。

彼は、オレにしか見えないらしいのだ。

…そして触る事ができない。

オレは自分がおかしくなったのかと思い精密検査までうけた。

しかし結果は異常なし。

オレは最大の疑問をまだ本人に聞いていなかった。

「天使って…。羽あるのか？」

そう聞くと彼は質問で返して来た。

「君は…？なんでボクが見えるの？ボクが見えるって事は君も天使なの？」

「はいっ！？？」

「だから、君天使なの？」

彼は目を輝かせながら聞いてくる。

オレは耳を疑つた。

オレが天使だなんてありえない。羽だつてないし。

しかし…そもそも天使に羽なんてあるのか？

さつき聞けなかつた質問をもう一度ぶつける。違う形で。

「羽ないし、天使じゃないと思うよ。」

そう言つてみた。

「あいまいだなあ…自分が天使かどうか分からぬの？背中見せて。

」

そう言われ背中を彼にむける。

「ああ…。君、羽が無くなってる…。しかもかなり小さい頃に。これ切れたあとかな?」

「それは多分、交通事故にあつた時の傷だよ。」

「でも」のキズは…」

交通事故。

しかし、この話しさは自分の記憶には無い。

オレが親に傷の事を聞くといつも

あんたは、小さい頃に事故にあつて死にかけたんだからね。そのときの傷だよ。

と、言われてきた。

そんな事を考えていると背中に激痛が走った。

今まで何度も痛みがあつた事があつたが、今回は比べ物にならない。

「うつ…。」

呼吸ができない…。

そして、そのままオレは氣を失った。

目が覚めるといつもの天井が目に入った。

「ふう…。今までのは夢だったのかな…。」
少しほほつとした。

次の瞬間。

背中に違和感があった。

「なんか気持ち悪い…。もしかして…羽…？」
手を回してみたが、それらしい感触はなかつた。
少しがつかりした。

「やういえばアイツは…？あつ夢か…。靈んでたし…。」

そう思った時。

部屋のドアが開いた。

「えつ…？」

とにかくオレは驚いた。

アイツが来たのだ。

そして今まで靈んでいたアイツがハツキリ見えるのだ。

「なんで夢のはずのお前がハツキリ見えるんだよ…？」「や…ゆめじ
やなかつたのか…？」

「君が変わったからだよ。」

微笑んでアイツは笑つ。

「いや…オレは何も変わって…。」

セヒが気づいた。背中の違和感の事を。

「なあ……。背中に違和感あるんだけど……。」

そういうと、アイツはにやけて言つた。

「羽が再生してるんだよ。」

「何……さつき触れなかつたけど?」

「自分の羽は、自分じゃ触れないんだ。」

「……なんで?」

率直な疑問をぶつける。

「羽がなきや普通の人間になれるんだもん。さつきまで君は人間だつたでしょ?」

「だつたでしょ……。今、天使つて実感わかないけど……。」

「じゃあ学校に行つてみれば?どうゆうことか解るよ。」

「どうゆう意味?」

「だから行けば解るつて!」

「わかつた……。行つてみる。」

彼に促されて、自宅をあとにした。

「ただいま…。」「

「意味わかった?」

「うん…。誰にも見えてないみたいだし、声かけても返事してくれないし…。」「

「やつぱつね

「お前も」「んな感じなのか?」

「まあね。」

「まあねじゅねえよ…。めひゅめひゅ歎しごじゅんーー。」「

「だけど、頬と仲良くなれたからや。」「

「ああ…。」「

「人間に戻りたい?」「

「戻りたいけど…もどれないんだる?羽触れないし。」
沈黙が続く。

沈黙を破ったのは彼の方だった。

「戻れるよ。言つたでしょ。聞いてなかつたの？“自分”じゃ触れないつて。」

そういうと彼は、おもむろにオレの羽に手を掛けた。

「お前…。そんな事したら…。」

オレを静止するように、彼が言つ。

「いいの…寂しいのには慣れてるからわ。」

「わかった…。じゃあこれだけは約束して…。」

「なに？」

「もしオレがまた羽が再生する」ことがあつたら、絶対会いに来て…。」

「わかつたよ。」

最後に笑いかけて來たが、ふと寂しそうな顔を見せた。

「羽には天使だった頃の記憶が詰まってるんだ…。バイバイ…。」

その後、辺りを光りが包み込んだ。

『気付けばベットの上。

「よく寝たあ～。」

「うわっ！～」

目の前に涙目の人気が立っていた。

「あれっ…？確かに羽は取り除いたはず…。なのに見えてる…？」

「確かに無くなつたね。」

オレは、そう言い返した。

「じゃあ…何で見えるんだよ！？」

「だつてオレ最初は羽なかつただろ？」

「？？」

「初めて会つた時だよ。」

「言いたい事がよくわかんないよ…」

「羽がなくても見えてたでしょ？」

「そつか！～」

今にも泣きそうだった顔が笑顔になる。

「よく分かんないけど記憶だつて残つてゐるし」

「えつ？？じゃあ…」

「 もう悲しい事言つなよ…バイバイとか…。」

「「」ねん…」

「 まあいいや。これからずっと一緒にだよな?」

「 もううう…」

こうしてオレには天使という友達ができた。
そしてアイツは今も俺の隣にずっといる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6791a/>

～天使～

2011年1月7日15時54分発行